

第一四七回

昭和六十一年九月二十八日

史跡めぐり

志村城跡

越谷市郷土研究会

と き 昭和六十一年九月二十八日

コース 越谷駅 北千住 日暮里 巢鴨 志村坂上駅

旧中山道 延命寺墓地 志村城跡・熊野神社 昼食

延命寺 龍福寺 小豆沢神社 総泉寺 志村一里塚

志村坂上駅 巢鴨 日暮里 北千住 越谷駅

東道 理事 丸田富夫

引用文献

いたばしの寺院
いたばしの神社
いたばし風土記
石仏
板橋区史跡散歩
日本石仏事典

同 同 同 板橋区教育委員会
同 同 同 同
雄山閣出版
学生社

文責

丸田富夫

一里塚

起原は中国に求めることが出来るが、わが国では徳川幕府がこの制度を確立した。慶長九年（一六〇四）徳川家康は秀忠に命じて、江戸日本橋を基点として、東海道・中山道・北陸道に、榎を植えた。一里塚を築かせ、全国に普及させた。榎を植えたのは、榎は根が深く広がって、塚が崩れにくいからである。古くから、里程は六町一里、三十六町一里、三十九町、四十八町、五十町、六十町などまちまちであつたのを、三十六町（約四キロメートル）を一里に定め、そのめやすに一里ごとに設けて旅人の便宜を図つた。クリもの料金もわかりやすく、また榎は、夏は日除け、冬は風除けとなり、旅人に喜ばれた。

工事は、旗本の永井白元、本田光重が奉行となり、江戸町年寄の榎屋藤左衛門と奈良屋市右衛門が担当し、大久保長安が総括した。地方の大名領の中はその大名に築造させ、五街道をはじめ全国の主要道路にはすべて一里塚が置かれた。塚の大きさは五間四方（約十メートル）高さ一文（約三メートル）が規定であつた。明治以後は、鉄道の発達とともに必要性がうすれ、荒廢した。

この一里塚は日本橋から三里目にあたり、新中山道（国道十七号線）工事のとき少し移動してゐるが、ほぼ完全にむかしのまゝ残つてゐるので、大正十一年交通史上の重要な遺跡として、国の史跡に指定されてゐる。

志村城趾

康正二年（一四五六）古河公方と上杉関東管領との争いに巻き込まれ、同族争いの結果市川城を追われて千葉実胤は石浜城（現浅草附近）に自胤は板橋の赤塚城と落ちのびた。このとき千葉信胤がこの志村城に入り、赤塚城の前衛点となつたと伝えられている。

この城は約七十年後の大永四年（一五二四）に北条早雲の子氏綱が、江戸城にいた上杉朝興を破り、朝興は川越城へ逃げたが、このときここで追いつかぬこの城は落城したと伝えられている。

この大永のころは、志村城主は千葉氏から篠田五郎に代替りしていたのか、延命寺縁起の開基見次権兵衛は篠田の家臣と記録されており、また初代城主の千葉信胤の子孫について全然記録がないので、信胤の重臣の篠田五郎がこの城をついでいたと思われろ。

この城は典型的な中世の城で、天陵の地形を利用し、北の山すそまで荒川の水がしたし、南には出井川の流水をめぐらせた要害の城であつた。

丘上の現志村小学校・コパル工場付近に本丸があつたようである。また熊野神社社殿横には空痕あとが現存している。

熊野神社

鎮座地 志村二丁目十六番二号

境内 七七〇七平方メートル(三八〇〇坪)

御祭神 伊佐那岐命(いざなぎのみこと)

伊佐那美命(いざなみのみこと)

事解男命(ことさかおのみこと)

山緒沿革

長久三年志村将監が紀州熊野からの勧請と伝えられる。天喜年中源頼義、義家が奥州追討の際武運長久を祈願され、その後康正年間千葉隠岐守信胤、この地城山の西北部に城砦を築き社殿の改修神地奉獻を行ったという。大永四年千葉氏滅亡後は志村七ヶ村の総領守となる。明治五年十一月十九日村社に、大正十三年七月五日に郷社に列せらる。康正年間銘の古碑あり。

絵馬殿 木造入母屋茅葺 二十三平方メートル 旧拝殿
を利用したもので、江戸中期の建築の様相を示す

絵画文書等

絵馬

大小あわせて七十数枚、古い年代のものには天保十
五甲辰四月吉日、寛政七乙卯四月吉日、元治二乙丑
三月吉日、等あり

古鏡二面(藤原時代白面鏡)

明治三十三年社殿改築の際、敷地より出土されたもの
である。もともと社殿は古墳の上に造られたもの
であろうか。山吹文鏡 松喰鶴文鏡

氏子総代

小川 良純 福田 芳弥 田中 直文 浜本 明治
半田 貢 上田元三郎

文献

○新編武蔵風土記稿卷之十四 豊島郡之六

志村 熊野神社

熊野社 社後丘上石祠に弥陀薬師観音の像を彫る。

是を奥の院と唱ふ、古は当村及び小豆沢・根葉・前
、野・中台・西台・蓮沼等七ヶ村の鎮守なりしが、今

は当村と中台村のみの鎮守となれり、社地は則城蹟なりと云、延命寺持

末社 八幡 ○稻荷社二 一は延命寺持、一は村持

○天神社 ○石神社、以上村民の持

○新版江戸名所図会 天権之部

熊野権現の宮 同じ所清水坂の上より三町ばかり西の方、涯統きにあり。社の後は涯に臨みて、松杉等の老樹鬱蒼たり。就中、樺の大樹は周圍三回に余れり。当社は住者千葉氏城内の鎮守たりといふ。今は志村より西の台までの間七ヶ村の産土神とす。土人この地を隱岐殿やしきと字す。今奥の院と称する地に石の小祠あり。十四五年前この地を穿ちて古鏡二面と刀一振とを得たりしとなり。されどその故をしらざれば崇あらん事を恐れ元の如く埋藏したりとなり。(寛政六年志村の里正大野吉住当社を修補し華表を石にし、又上の宮の地に六百三十五株の杉を栽ゑたり。)別当は新義の真言宗にして三次山延命

寺と号し、中野法仙寺に属せり。延命寺の鎮守を三次権現と稱す。往昔この地の城主千葉隱岐守の家臣三次某の靈をまつると伝ふ：

○嘉陵紀行(村尾正靖)第三編

…志村の坂を過る頃、申の刻計なれど、又もんはいつとしらねば、ここの坂を横折ゆきて、熊野権現にまふではべり、もと参りし頃は、社のうしろの岨の木立もたちのびねば、秩父の山々はもとより、其むかひにあたれる碓氷の統の山々、近くは丸池のあたり、人の行かひ、はた西北のかた、新座よりこなたにつらなれる田のも一目に見わたされて、又なきながめせしに、今は岨の木たけ高ふ成て梢に遠望をさへぎりて、落葉はしつれども、思ふ様には見えず、ことさらに夕ぎりたちこめて、しるかりし山々もなれとだに見えず、あまたの年を経ざりしか、樹の立のび侍る、かくのごとくならんとは、思ひよりはべらず、山の西のふもとを下り見るに、一逕を通ずるのみにして、他に路なし、くだりはつれば、やや田

の面を見わたす、たちもどりて、もとの広前に至り、又いつかはと、石の鳥居の前に還、拝し奉り、かへさに赴く土人に、そのかみの事ども間に、誰もしるものなし、東の入口西の入口に同じく小坂あり、其外に昔からの堀の跡、それとしるく見ゆ、今はなら松杉など植こめて林と成。(文政十一年戊子十月)

○武江披砂(太田南畝)

…それより庚甲塚の前に出て、西の方へゆけば石の鳥居あり、熊野三社の宮居なり、大門の長さ志町余、大きな杉の囲一丈五六尺にあまれる多し、柀椎の木など目馴れぬ大木多し、社の傍へ奥の院道といへる碑あり、奥の院といへる三字、関其寧の額、石の鳥居にかけてあり、奥の院は石もて作れる小社なり、熊野三社大権現奥の院別当見次山松寿院延命寺十六世法印祐海代、武州豊島郡志村願主大野藤左衛門吉住と刻あり奥の院のうしろの山は古木松杉生ひ茂りて、見渡す田面の眺望かぎりなし、その中にわけて杉の大きなた

てり、下に狐の穴あり、から堀の跡なども所々に見えてげにも城跡と見ゆ、是いはゆる城山なり、何人の城にやありけむ未詳。

○大野文書

付届状之事

武州豊島郡志村

領守

熊野三社

右者是迄同村延命寺別当ニ罷在候処今般 王政御一新ニ付僧形ニテハ 神務難相成旨奉拝承依之氏子村役人一同相談決着之上 貴殿江、附届仕候処相違無御座候 右ニ付故障筋毛頭無之 然上ハ 神事祭礼差ツカエ無ク神務ナサルベク候 附届一札差出申処依而如件

明治二己年 志村別当 延命寺

村役人惣代 氏子惣代

袋村

神主 広川隼人 殿

延命寺

所在地 志村一丁目二番二二号
境内 三、四六八平方メートル

(幼稚園敷地一、一四二平方メートルを除く)

宗派 真言宗 豊山派

山号院号 見次山 松寿院

本山 長谷寺 (奈良県桜井市初瀬)

本尊 地藏菩薩 年代作者不詳

明治三十六年全焼後、中野宝仙寺よ

り移されたもの

開基 見次権兵衛

開山 頼真

現住職 斎藤了溪

世代

開基 大永四年 見次権兵衛

一世 頼真 慶長十八年寂

由緒沿革

寺の縁起に伝えて言う、大永四年(一五二四)

小田原北条氏綱が江戸城より川越城へ逃げる上杉

朝興(扇谷)を追い、ここで戦となった時、志村

城が落城した。その時城主と言われる篠田五郎の

家臣に見次権兵衛という者があった。権兵衛は庭

先で子息の権太郎の討死するを見て無常を知り、

自分の邸宅を寺として延命寺を創建し、自ら開基

になったという。享保中徳川吉宗がこの辺で鷹狩

の際、当寺に成られて御成門・腰掛等設けたが安

永の頃取払われたという。江戸時代には熊野神社

の別当となり、明治二十一年の町村制の折は、志

村外七ヶ村合併した志村役場が置かれた。その後

明治三十六年三月の火災の時、鐘楼・山門を残し

て総べての堂宇を焼失し、仏像・宝物・古文書類等一切を失ってしまった。

堂 宇

本 堂

現在の建築物は明治四十三年のもので三十二坪であるが、昭和五十六年七月より改築に着工し同五十九年七月に竣工の予定、延八十三坪予定

庫 裡

旧庫裡は明治四十一年の建築であったが、昭和三十六年に新築。九十七坪

鐘楼・山門

明治初期の建築で、明治三十六年の火災の際は焼け残った。梵鐘は戦時供出し現在ののは戦後のものである。

法 会

花まつり(四月) 施餓鬼会 春秋彼岸会 お盆会

十夜(十月二十四日)曾ては盛大であった。
講 志村一丁目・坂上・坂下を中心として念仏講が盛んである

境内物

薬師堂

石造舟型光背薬師如来坐像陽刻 高さ一〇七浬
板橋区最古の石仏で正保四年(一六四七)、庚申待結衆敬白の銘がある。疣うぶの平癒に靈験ありと言われ、蛸たこ薬師として有名。

板橋区最古の板碑

建長四年(一二五二)の大日一尊種子心字蓮座
で上部欠損、高さ八五浬

隠れ切支丹灯籠

その様式から、かく称せられる。高さ一九三浬
年号刻なく、「錦上舗花・一人重・山松无心風
來人」の銘がある。関西より移入のものという

コブ標

昭和五年東京府の「天然記念物」に指定された頃は、周囲一〇米七二ほどあり、幹には大きなこぶが生じて凹凸が甚しく、府内最大で樹令七百年と称された。その後、樹勢衰え枯死したため戦後指定が解除されたが、現在なお枯死の根幹部は保存されている。

檀家

概数 約二〇〇

地域 志村一・二・三丁目、小豆沢一・二丁目

目の中仙道沿、坂下・東坂下等

総代 責任役員 市川達次・大野邦雄・副住

職 齊藤精一

その他 小川良純・三田正乎・齊藤晃

一・大野栄一・平山太吉・平山重治・

大野和夫・大野幸雄・橋本和也・大野

作佳・大野鎌二郎

文献

○新編武蔵風土記稿卷之十四 豊島郡之六

新義真言宗、多摩郡中野村宝仙寺末、見次山松寿院と号す、本尊三尊の弥陀なり、又毘沙門天聖徳太子弘法大師の三軀を置、何れも弘法大師の作と云、寺伝に據に、往昔篠田五郎と云者当所に在城の頃、家臣見次権兵衛此北に居住す、其後宅地を捨てて当寺をここに建立し、己が氏を以て山号銘すと云、鐘銘にも彼が建立の由見ゆ、草創の年代詳ならず、世内の内頼信慶長十八年寂せしを旧しとす、享保年中此辺放鷹の頃、当寺へ成らせられし故に、御腰掛御成御門等を設られしか、安永の頃御取掃となれり、されど此辺御放鷹の頃は今も御膳所となれり、門前に老槻樹あり四圍許、鐘楼天明八年正月の再鋳なり、見次権現社開基見次権兵衛の靈を祀れり、地藏堂延命寺持

○豊島郡誌

大字志村坂上に在り、新義真言中野村宝仙寺の末寺

本尊は地藏尊なり、寺伝に篠山五郎当所に在城の
頃家臣見次権兵衛住し当寺を建立せりと、開基塔
に曰

武之豊島郡志村有延命寺、大永四年見次権兵衛
之所勅、初千葉宗族居城于此、北条氏之来攻城
主与其臣見次権太郎戰不勝死之、父権兵衛建寺
以祈冥福、名曰見次山松寿院延命寺、以真言為
宗、法灯不断三百八十年、于此、明治三十六年
三月二十八日偶祝融為伽藍蕩尽、翌年予承乏任
持乃与檀徒胥謀復旧觀、以四十三年五月五日落
慶仍造権兵衛塔名曰開基、塔庶乎足以慰其靈矣
其開山詳かならずと雖世代の内頼真慶長十八年寂
せしを旧とす、享保中徳川吉宗公此辺放鷹の時、
當時に成らせられし故に御成門御腰掛の設ありし
も、安永の頃取払となれり、開基見次氏の子孫所
蔵の書に換れば、大永四年正月城山没落のことを
記し、城主の名を夷胤とあり、惜むらくは寺伝の
古書等明治三十六年三月祝融の災に罹り今一片の

古文書見る能はず、唯境内の巨樗七百年前後のもの
たるに見て草創の昔を偲ぶのみ。

○徳川吉宗の鷹狩と延命寺(板橋区史)

享保三年三月十三日吉宗志村に狩し、附近の村々か
ら勢子三千人を動員して獲物百五十七羽を得、この
時延命寺に立寄り住僧に銀を与えた。

同四年三月一日吉宗志村に狩を行い、自ら勢子の老
を指図し、自身も雉子四羽を獲た、生捕りの三羽は
籠に入れて帰城し、これを後に九代將軍家重となつ
た世子長福の土産とした、この時も延命寺に休憩す
る。同十二月二十三日、吉宗戸田川辺に狩し、自ら
鶴・鷺などを獲、延命寺に立寄る。

同七年三月十八日吉宗は御立場を小豆沢の茅野に設
え、騎馬の勢子を荒川の堤に並べ、戸田、志村に追
鳥狩を行った。この日も延命寺を休息所とする。

同十九年四月十一日吉宗が戸田、志村原で追鳥狩を
催し、雉子を多く獲て、延命寺に憩うた。

龍福寺

所在地 小豆沢四丁目一六番三号

境内 一九八〇平方米(六〇〇坪)

宗派 真言宗 智山派

山号院号 栗王山 東光院

木山 智積院(京都市東山区東山七糸)

木尊 大日如来 年代・作者不詳

開山 不詳

現住職 小笠原正雄

世代

不詳。新編武蔵風土記稿時代に既に不詳である。

歴代の住僧の墓碑は幾つか残っているが、文書

位牌等は今次の空襲に依って爆破され殆ど残っ

ていないので、世代は明らかにすることは出来

ない。墓碑のうち、五輪塔に「宥尊正保四年□

□」が見られるだけである。

堂宇

本堂 昭和三十四年四月建立 約四〇坪

庫裡 昭和五十年四月建築 約五〇坪

薬師堂 秘仏「薬師如来」を安置する

主な仏像

本尊大日如来 年代作者不詳

秘仏薬師如来 天長年間、水中から拾われたとい

う木造

弘法大師像・興教大師像 年代作者不詳

板碑

本寺は通称「板碑の寺」と言われるほど、板碑を多く存して有名である。

○建長七年三月十六日板碑 高さ一六〇樞

○延慶二年己酉五月板碑 高さ一三〇樞

○正和四年八月板碑 高さ五二樞

○元徳三年八月板碑 外

小豆沢神社

文献

鎮座地

小豆沢四丁目十六番五号

○新編武蔵風土記稿卷之十四 豊島郡之六

境内

四七六平方米（一四三坪八）

小豆沢村 十二天社

御祭神

国之常立神（くにのとこたちのかみ）

宇比地邇尊（ういじにのみこと）

鵜葺葺不合命（うがやふきあひすのみこと）

意富斗能地神（おおとのじのかみ）

須比地邇神（すいじにのかみ）

しなど伝へり
○北豊島郡誌

山緒沿革

大字小豆沢字宮の前にあり、旧小豆沢村の鎮守にして、十二天と称せり、此地往古七々子崎と称し十二の入江ありしとて、後年十二天に配祀せしなりと伝へり。維新後社名を改む。大祭十月五日。

○北豊島郡総覧

旧大字小豆沢宮の前にあって、十二天社と称せられた。康平年中源義家の勸請と伝えられる。この付近は昔七々子崎と称して十二の入江があったため、後年十二天に配祀したものであろう。明治二年社号を小豆沢神社と改め、別当職竜福寺無住にて復飾不能なため、袋村の神主広川主教を祠堂とした。

字宮の前にある。元は十二天社と称し旧小豆沢村の鎮守である。此の地往時七々子崎と称し十二の入江があったので十二天に配祀したのだが明治初年改称。因に記す当社は古墳の上に建ててある。

総 泉 寺

所在地 小豆沢三丁目七番九号

境内 五二三五平方米(一五一六坪六八)

宗 派 曹洞宗

山 号 妙亀山

本 山 永平寺(福井県)総持寺(横浜市)

本 尊 釈迦牟尼仏 康正二年(一四六五)

作者不詳

開 基 千葉介

開 山 不詳

曹洞改宗開山 源叟宗俊(相模最乗寺三世)

中興開基 千葉守胤(総泉寺院殿長山昌愷大居士)

由緒沿革

もと浅草橋場にあり曹洞江戸初開の道場。開

創は貞元(九七六一七)以前とも伝える。創立は建仁元年(一一〇一)二月。開基は千葉介。開山僧は不詳。当初は法相或は律相であった。後、禪宗となり、曹洞改宗開山は相模最乗寺三世源叟宗俊、

中興開基は千葉介守胤(法名総泉寺院殿長山昌愷大居士、弘治三年一五五七・一一・八寂)以後代々千葉氏(石浜城主)の菩提寺となる。地元民をはじめ、北条・太田・宇都宮・遠山・梁田ら諸將の尊信を集めた。旧地内周辺は城址との説もある。

山号「妙亀」は貞元元年三月十五日非業の死を遂げた梅若丸を弔うため母妙亀が尼となり庵を結び此の寺のはじめをなしたという伝承に依る。

中世は会下寺とも呼ばれ、永祿二年には石浜会下領四十貫九百文を有し、雲水は常に三、三百人が集っていたという。近世に入り徳川家康の小田原攻略の際、境内の竹を旗竿に献上したことから御朱印二十石、境内二万八千坪を給さる。後、版

狩の折の御膳所に指定さる。

法中塔

庚申塔の多く集められていることで知られている。
現在十六基保存されている。

万治三年、天和四年、貞享二年、元禄三年、
元禄七年、正徳二年、正徳四年、享保四年、
寛政六年、天保七年、嘉永五年のもの二基
不詳年のもの四基、

榎家

概数 二三〇軒
分布 半数は小豆沢、他は板橋区内その他
総代 平岩正勝 外四人

文献

○新編武蔵風土記稿卷之十四 豊島郡之六

新義真言宗、袋村真頂院の末、薬王山東光院と号す、本尊大日、別に不動を安す、共に運慶の作、世代の内、宥尊正保四年十二月廿四日寂すと言ひこの

外のことを伝へず、客殿の軒に明和四年鑄造の大鐘をかく、什宝に乗鞍一掛あり、境内薬師仏と同時に水中より得しと、破損せるさまいと古色なり
鎧もありし由今は失へり、興隆寺（南照山と号す本尊弥陀）、問魔堂、教性院、以上龍福寺の門徒なり、慈剣山と号す、不動を本尊とす、地藏堂（教性院の持）、堂側に古碑五基あり、一は成善、建長七年三月十六日孝子敬白、一は慶己酉三月十五日とあり、上欠攘せり、干支に據に延慶二年己酉なるべし、一は嘉暦三年七月日、一は光運建武三、一は永正五年七月十五日逆修性本禪門とあり
観音堂、教性院の持

小豆沢村は、往昔荒川の入江に傍て七々崎と鳴へし磯の浜なり、平将門東園を押領せし頃、貢物の小豆を積来りし船、この江に沈みしかは此名は起れりと、「龍福寺薬師縁起」に見えたり
薬師堂、寺記に云、天長年中当所は七々子崎と云入江なり、江中夜々光を放つ依て此像を得て安置

せり、其出現せし池と云は境内の後背にて今は御手洗となれり

○大日本地名辞書

龍福寺は、志村の大字小豆沢に在り。古板碑の多きを以て好事者に知らる。真言新義宗、荒川に臨める断崖にて、七七子崎といふ。龍福寺の板碑は、建長七年（成善、建長七年三月日、孝子等敬白）の者長六尺、巾一尺五寸、厚二寸五分、弘安の者（上下断折す）延慶二年、建武二年卯月、同八月、同三年康正三年等の数枚あり、又隣村袋（岩渕）真頂院にも、元徳、文明の銘ある碑あり。

○北豊島郡誌

大字小豆沢宇宮前に在り、薬王山東光院と云ふ、新義真言宗袋村真頂院末なり。本尊は大日如来別に不動尊を安置す、共に運慶作と云ふ、当山の本尊は薬師如来（龍猛菩薩の御直作と云ふ）なりしが、今は別に薬師堂を建立して安置し秘仏として拝することとを許さず、五代前の住職強て拝して明を失せりと

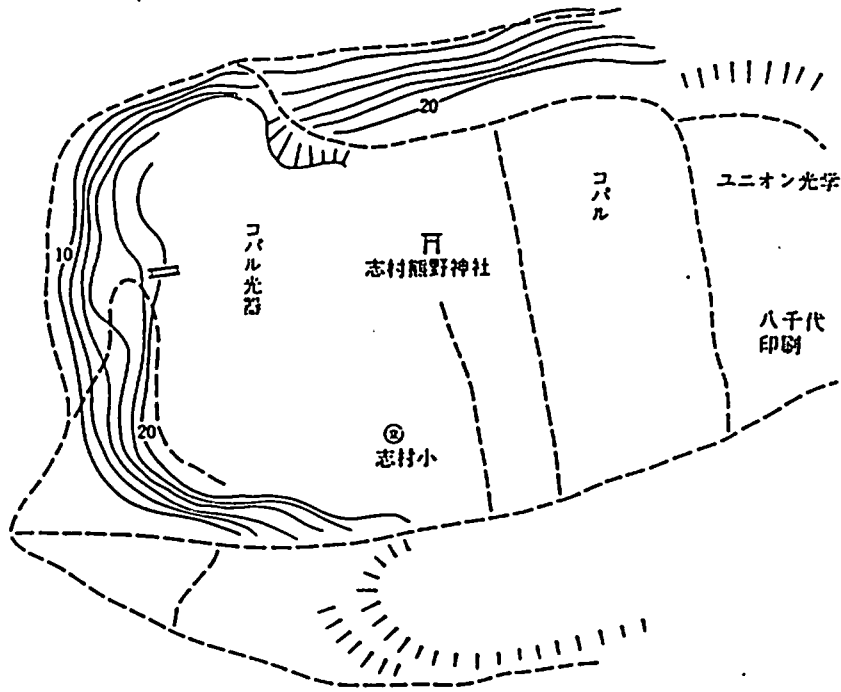
云ふ、古昔より薬師尊へ龍灯の献供あり、其の灯のかかりし樹を龍灯松と号す、明治維新後小豆沢宇原組の香龍寺と同中台組の教照とを当寺に併合せり。

古昔戦争の際志村の庄一円兵火にかかりしも当寺のみ免れたりしかば、焼残りの龍福寺てふ俚諺残れりと雖も、古書類皆無にて閉山等知るに由なし、然れども建長七年弘安延慶三年建武等の板碑十余枚現存するを見るは、古き寺院なることは明かなり。此地昔荒川の入江にて七七子崎と唱へし港なり、平将門東国を押領せし頃、貢物の小豆を積載したる船、此入江に沈みしかば此名起れりと、同寺の縁起に見えたり。

○大東京の史蹟と名所

（上略）延慶二年五月の阿弥陀三尊種子板碑には梵字光明真言を刻み、梵字の代りに漢字で書いたもの等もあるが、兎に角浄土教と真言宗とが当時入り乱れて行はれたことを語っている。

志村城跡略図



「東京都中野城跡地調査報告」より

十王信仰とは閻魔大王などで知られている冥府には十王がいて、亡者は七七日中の毎日、七日、百カ日、一周忌、三回忌にそれぞれ生前の罪のさばきを受けることになっている。したがって、次のような一定の順序と忌日が決められているので、それに従って供養しなければいけないと説かれている。

| | 十王 | 本地仏 | 忌日 | 子修日 |
|----|------|-------|------|---------|
| 1 | 奏広王 | 不動明王 | 初七日 | 一月十六日 |
| 2 | 初江王 | 釈迦如来 | 二七日 | 二月二十九日 |
| 3 | 宋帝王 | 文殊菩薩 | 三七日 | 三月二十五日 |
| 4 | 伍官王 | 普賢菩薩 | 四七日 | 四月十日 |
| 5 | 閻魔王 | 地藏菩薩 | 五七日 | 五月二十三日 |
| 6 | 變成王 | 弥勒菩薩 | 六七日 | 六月五日 |
| 7 | 泰山府君 | 薬師如来 | 七七日 | 七月八日 |
| 8 | 平等王 | 観音菩薩 | 百カ日 | 八月十八日 |
| 9 | 都市王 | 勢至菩薩 | 一年 | 九月二十三日 |
| 10 | 五道転輪 | 阿弥陀如来 | 三年 | 十月十五日 |
| 11 | | 阿閼如来 | 七年 | 十一月十五日 |
| 12 | | 大日如来 | 十三年 | 十一月二十八日 |
| 13 | | 虚空蔵菩薩 | 三十三年 | 十二月十三日 |